

人間にとって寿命とはなにか

本川 達雄

- 1948年宮城県生まれ。東京大学理学部卒業。
- 東京工業大学名誉教授。専門はナマコの生物学。
- 著書に「ゾウの時間ネズミの時間」「生物多様性」「歌う生物学」など。

2014年4月以降は、執筆と非常勤講師をしながらの年金生活者。小学校5年の国語の教科書(光村出版)に本川の書いた「生き物は円柱形」という文章が掲載されており、小学校でのボランティア出前授業に励んでいる。出向いた学校はすでに100校になんなんとしている。なにせ年寄りには次世代を育てることに意味を見いだすべしと、生物学から人生訓を引き出しているため、それを実践しているつもり。

「清く 正しく 貧しく 美しく、めざせ、学問の宝塚！」がスローガン

科学は、技術の基礎となり、ものをつくったり病気をなおしたりと、直接生活の役に立つ面ばかりが強調されています。しかし科学には別の面もあります。私は科学とは自然の見方、つまり世界観を与えるものだと考えています。現代の私たちは、古典物理学の与える世界像・世界観をもって日々、暮らしています。18-20世紀は物理学の世界観が私たちの日常生活を支配してきました。しかし21世紀は生物学にもとづく世界観が広まらねばならないと私は強く感じています。時間の見方も、古典物理学的な時間では、私たちは、ただ時計に縛られるだけです。時間の奴隷になっているのが現代人ではないでしょうか。ところが、生物学的に時間を見れば、生物たちは、時間を自分なりにコントロールしていることが分かります。だから時間の主人になれるわけです。生物学的時間という考えにたどり着いたとき、私は肩の力がスッと抜けていく気がしました。こういう見方こそ、皆さんにお知らせしなければと思います。「ゾウの時間ネズミの時間」を書いたのです。それ以来、生物学的世界観を分かりやすく説く著書を執筆することをこころがけてきました。私はナマコという、私たちとはまったく違った生き方をしている動物とつき合っているのですが、そうしていると、世界を見る目がかわってきます。世界が違って見えてくるのです。そして、沖縄の小さな島での生活も、私が世界を見る目をかえてくれました。そういう経験も、書いて伝えるべきだと思っています。



- ヒトは生物学的見地から見れば41.5歳が寿命であり、現代人は膨大なエネルギーにより生かされている「人工生命体」だ。自然界では、老いが始める頃、自然淘汰されるものです(自然界の寿命)。

- 縄文時代の人の寿命は30歳、昭和のはじめで50歳、今は80歳~90歳。技術の進歩、社会の状況が変わり、寿命が延びた。医療の進歩、食料、冷蔵庫の出現、冷暖房装置などのお蔭で生活スタイルが変わり、それらが長寿に貢献している。生物学的見地から見た人の寿命は42歳位(身体の保証期限切れ)です。昔、野菜を保存し食べるには塩分の強い漬物にしていた。そのため血圧が高くなり、脳溢血が多かった。今は冷蔵庫のお蔭で長期保存ができ、食生活が豊かになった。身体の保証期限切れの42歳位から現在の80歳、90歳の寿命は技術の進歩、社会状況の変化などにより生み出された人工的なもので、「人工生命体」と言える。42歳以降の命は近代の技術により作られた、おまけの人生と考えることができる。おまけの人生は次世代の為に何かをしたいものです。

- 生物は一般的に大きいものほど長生き、小さいものは短命。象の花子は70歳まで生きた。ハツカネズミの寿命は約1年。ハツカネズミは20日間、お母さんのおなかにおいて生まれるから「ハツカネズミ」の名がついた。象の赤ちゃんは600日、お母さんのおなかの中にいる。人間は10月10日。

身体の小さい生物はエネルギー消費量が高い⇒短命 雀は1~3年、カラスは10年~20年
 身体の大さい生物はエネルギー消費量が低い⇒長命 象 60から80歳、キリン飼育下では20~30年、野生では10~15年。
 ミル貝 160年。ハオリムシ170~250年。赤ウニ 200年以上。北極鯨150~200年。鯉 20~70年。アイスランド貝 数百年。
 ムカシカゲ、恐らく全爬虫類のなかで最も成長が遅く、35歳位までは成長を続ける。寿命は100年以上とも言われている
 ゾウガメ 100年以上生きるものが多い。